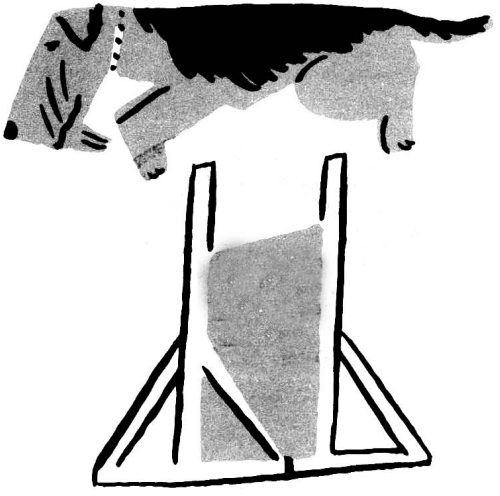
コメディアン犬舎犬地獄

書下ろし 長編小説

沼田陽一

アン犬舎犬地



光文社

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
(郵便番号112)
光文社　出版局

長編小説　**コメディアン犬舎犬地獄**

昭和53年2月28日　初版1刷発行

著者　沼田陽一
東京都板橋区常盤台4-29-8

発行者　小保方宇三郎

印刷者　萩原崇男
東京都文京区後楽2-21-12
萩原印刷

発行所　東京都文京区音羽2
振替 東京6-115347
株式会社 光文社
電話 東京(942) 2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　(榎本製本)

© Yōiti Numata 1978

(分)0-0-93(製)92031(出)2271 (0)
Printed in Japan

目次

第一章　三人の男　5
第二章　心の深い傷　55
第三章　転居と借金　95
第四章　展覧会の女　131
第五章　犬俗物たち　159

装幀　山下勇三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

コメディアン犬舎犬地獄

沼田陽一

第一章　三人の男

1

午後七時のテレビのニュースが終わった。その日は四月中旬の日曜日で、根岸の家の居間には家族全員が揃っていた。妻の初子と長男の喬、長女の苑子、それに姓は違うが根岸の生母の今井きぬの五人が根岸の家族である。喬は高校二年で苑子は中学二年になったばかりだった。

「遅いねえ。なにをぐずぐずしているのかねえ」

きぬは何度目かの同じことを呟いたが、根岸は返事をしなかった。食事はもう終わっていたが、根岸だけがまだ飲んでいた。子どもたちは、それぞれ雑誌を見ており、妻は手持ち無沙汰に朝刊を見ている。

根岸が不機嫌なのを妻も子どもたちも知っているが、母だけがまるで気がつかないでいるらしいことが根岸にはなおさらいまいましかった。躁ぎっぱなしの感がある。話は犬のことばかりである。若いサムがあんなに母性愛が強いとは思わなかったと、繰り返しいっていた。いままでの犬たちに比較しても、仔犬を手放したとき、サムみたいにいつまでも啼いた犬はいなかったということを、昔の犬のボビィやアルマやエミリィの例を出しては話していた。初子が仕方がなさそ

うに相槌を打っていた。
「でもいいよ。いちばんかわいがってくれる人のところに行ったのだから、インゲは幸せになるわ。展覧会に出してくれなくてもいいから、かわいがってくれる人がいちばんよ」
なにをいってやがるんだ。あんなにかわいい仔犬を手放してしまって、よく平気で笑っていられるな、と根岸は口に出して罵りたかった。
そのとき電話が鳴った。
「そら、きた。やっと掛かったわ」
きぬは大急ぎで受話器に手を伸ばした。いつもは玄関に置いてある受話器は今夜はコードを一杯に伸ばして、この部屋の隅にある。きぬも根岸もこの電話が鳴るのを、先刻からいまかいまかと待っていたのである。電話は心づもりよりは、かれこれ一時間以上も遅れて鳴った。

根岸は毎晩飲むウイスキーはタンブラー一杯を定量と称していた。それを別のタンブラーに移し、薄い水わりにするのだが、今夜はとっくにその定量を飲んでしまい、追加分を作っても気持ちよく酔うことはできなかった。午後になって島村がサムの仔のインゲを取りに来て以来の、母の態度の一つ一つに腹を立てていた。口のきき方から笑顔までが卑しく思えてならない。とりわけ、帰りがけに島村が差し出した二万円という金を受け取ったことと、根岸に対して、駅まで島村を送って行くようにと命じたことが不愉快だった。
「英輔、自転車で駅まで送っていってさしあげてよ。インゲは重いから……」
島村の前でそういわれればいやとはいえない。
「大丈夫です。抱えていけばわけはないですよ。それにしてもこんなに大きくなっているとは思

わなかったな。前のときの倍はありますね」
島村は小さなバスケットを持ってきていたが、生後七十五日のエアデールテリアがそれに入るはずはなかった。結局、きぬが用意しておいた段ボール箱に空気穴を裁ち物鋏の先でたくさんこじあけて、それに入れることにした。その箱はビニールの風呂敷でくるんだ。
「新幹線に乗ったら、すぐ箱から出してやって膝に抱えてください。車掌だって文句をいわないはずですから。文句をいったら犬の料金を払えばいいんです。この間、和歌山まで行った犬もそうやって持っていったんです。電車の中では、他の乗客にもかわいがってもらったそうですよ」
きぬは箱に入れる前にインゲを抱いて犬舎の戸を開けた。きぬの居間兼犬専用の台所の隣りに六畳ほどの三和土(たたき)があり、そこが犬たちの寝室になっている。そこから庭の金網囲いの運動場まで、およそ根岸の家の敷地の三分の一が犬たちのためのスペースであった。
犬はインゲを別にして全部で四匹いた。一年八カ月になる牡のボンと牝のサム、それにこの二匹の母犬で七歳半のロイ。十歳のジュディの四匹がエアデールテリアの一家族である。この正月までは、さらにジュディには姉にあたるホリィがいたのだが、ホリィは十一歳半で乳ガンで死んでいた。インゲはサムとボンの間に生まれた仔犬だった。むろん、同胎の牡牝に交配をさせる繁殖者はいない。インゲはきぬのちょっとした不注意によって生まれた仔犬といってよかった。
犬の寝室になっている部分には、いまはサムとボンの二匹しか入れていない。祖母犬のジュディ、母犬のロイは金網囲いの運動場のほうに出されてある。きぬはガラス戸を一尺ほどあけ、インゲを両手で持って差し出しながらいった。
「インゲ、さあお別れですよ。かわいがってもらいますからね……。お母ちゃんにそういいなさい」

お別れ？……いやなことをいう。根岸はこのとき、葬式の一つの場面が胸をかすめて一瞬不吉な予感がした。サムも部屋のなかにいる島村のほうを見て怯えたように吠えた。

箱に入れようとすると、インゲは元気がいいから暴れてすぐ飛び出してしまう。

「インゲ、おとなしくしなさい。ちょっとの間だから我慢するのよ。みんな我慢してよそのお家へ行ってかわいがってもらったのよ」

きぬはインゲの黒い頭を強引に押して、箱の蓋を閉めた。閉めると同時に大急ぎで腰紐で縛っていく。根岸はそばで見ていて、手伝おうとはしなかった。インゲは箱に閉じこめられると、はじめは「クンクン」と啼いたがすぐ、「キャンキャン」と大きな声を出した。それにつられてサムは「アオアオー」と啼いた。

外に出て自転車の荷台に積んでからも、インゲは啼きやまなかった。

根岸の家は東上線の上板橋からほんの二、三分の距離にある。路地を出るとすぐが商店街である。日曜日の午後は人通りが多い。インゲの啼き声で、すれ違う人がふり返るなかを根岸は自転車を押しながら島村と並んで歩いた。

こんなことをしているから、近所の知らない者からは、おれは犬屋と間違えられるのだな……と思った。いや、店を出しているわけではないから、犬ブローカーというところだろう。喬がまだ小学校の低学年の頃、「うちは犬屋？」と聞いたことがある。「どうして？」と問うと「だって僕のことを犬屋の子という奴がいるんだよ」と答えた。

「道楽だからお金と時間を使うことは仕方がないわよ。でも、それで不愉快な思いをすることまではないじゃないの。犬がかわいいなら一匹か二匹の犬だけ死ぬまで徹底的にかわいがってやればいいのよ。五匹も六匹も増やして、食費だけだって大変なのに……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

このときも妻の初子は涙声になってそういった。根岸がいつの場合でも結局は母の意見に押しきられて犬の繁殖を許してしまうことを非難していた。まったくこれは因果としかいいようがないが、根岸も正確に母の血を受け継いでいる犬好きであった。だから自分の家に生まれた仔犬を見て、その中から特に情が移ってしまう犬が出来ると、どうしたって手放したくなくなってしまう。身分不相応に犬の数が増えるだけではない。母が所属する「東洋エアデールテリアクラブ」にいつの間にか引きずりこまれるような形で会員になり、いまではその運営面の仕事まで引き受けていた。

年五回の機関誌の編集、年二回の展覧会の準備と出陳、トリミングをはじめ各種の研究会、それに毎日の犬の運動と手入れ、犬小屋の掃除など、根岸ときぬの日常はまるで犬を中心にして回転しているといってよかった。加えて犬仲間との煩わしい人間関係も生じている。直情径行のきぬが背負いこんでくるトラブルは、どうしても根岸に波及する。根岸が正面に立って弁明や仲裁をしなければ収拾のつかない場合も多かった。

根岸は妻からいわれるまでもなく、こうした生活の一切を改革したかった。犬は趣味として自分の犬だけをかわいがっていればよい。愛犬家と称する赤の他人とは一切の関係を断つ。むろん、エアデールテリアの愛好家の団体のあることを無視し、展覧会には出陳させない。かわいがっている犬が死んだら、犬業者から買ってくる。一切繁殖にはかかずらわない。そうすればどれだけ、毎日がすっきりするだろうと夢想するのだが、彼は母がいる限り、そうした生活はほとんど不可能に近いことも知っていたのである。それは母の生きがいや誇りに属する問題といってよかった。母の人生の失敗はすべてエアデールテリアに集約され、心の傷の代償をそこに求めている。根岸はそんな母がいたましかった。同時にあわれであった。出来ることなら母の人生そのもののやり

なおしをさせてやりたかった。だが、この母によって幼いときから心に深い傷を負わされてきたと思うこともあり、母を憎んでいる自分に気づくこともあった。だからこそ根岸もまた、エアデールがいじらしく愛らしく思えるのかも知れない。

駅まで来てインゲの箱を渡すと、島村は「この犬が大きくなったころ是非、奥さんとご一緒に遊びにいらしてください。家内も喜びますから……」といった。島村が家に来て去るまで初子は苑子を連れて外出していて島村と会わなかった。初子は島村の細君には年二回ほど会う機会がある。島村は高校の教師で細君はモダンバレエの踊り手であった。自宅でモダンダンスの教室を開いている。苑子も幼稚園時代からモダンダンスを習っており、年二回各バレエ団の合同公演があるからである。根岸は島村の困ったような笑顔を、五年前とまったく変わらないなと思った。この男の俗っぽくない感じに好感を持っていた。

家に帰ると待ちかねていて話しかけようとする母に生返事をして、根岸は自分の仕事部屋に入った。根岸には明日までが一応の締切りになっている家庭雑誌の特集記事をまとめる仕事がある。

出版社勤めを辞めて、フリーのライターになってからもう十年以上たっていた。その間、週刊誌や婦人雑誌やPR誌に書くほか、さまざまな分野の有名人のゴーストライターなどをやり、ひと頃は同年輩のサラリーマンの二倍以上の収入があったが、週刊誌の仕事はここ二、三年は依頼されることが少なくなっていた。根岸はあと三カ月たてばもう四十七歳になる。若い女性向きの週刊誌に適するライターとは自分でも思えなかった。体力的にも、取材記者が集めてくるデータをもとに、徹夜でまとめなければならない週刊誌の仕事は辛くなっていた。

それで最近ではペンネームを使って三流の夕刊新聞に連載小説を書いたり、本名で小説雑誌に中間小説を書く機会もあったが、そのままライターから作家へ転向できるのかと考えると心細い

思いが胸をよぎった。実際、犬にうつつを抜かしていていい時期ではなかった。
部屋に戻って一時間近くたつと、犬舎からサムの啼く声が聞こえてきた。初めは「クンクン」と鼻を鳴らしている様子だったが、やがて「アオアオアオ」といかにも悲しそうな大きな声に変わっていた。サムは子どもを取られたことをあんなにも悲しがっていると思うと、根岸は自分の胸が締めつけられるような思いがした。
インゲの同胎は全部で五匹生まれたのだが、そのうちの三匹は、生まれたときから極近親繁殖の子という遺伝的致死因子があったのだろう。わずかに数時間のうちにつぎつぎに死んでいった。そのうちの一匹は尻尾のついてない奇形児だった。その代わりのように残された二匹は、きぬが戦後の二十数年間に十八回繁殖させた経験をもってしても、稀に見るほどの素晴らしい仔犬だった。二匹とも牝だったが、すくすくと育っていった。そのうちの一匹はすでに一週間前に、和歌山の愛犬家へ譲ってあった。このときはサムはあんなふうには啼かなかった。やはり最後の一匹ということで悲しいのだろう。
それにしても、サムの啼き声は尋常ではない。それに根岸が駅まで行って戻ってきたとき啼きやんでいたサムがなぜいま頃、また啼き出したのかも不思議だった。
根岸が母の部屋に行ってみると、きぬはすでに犬舎の中に入っていた。
「こんなに母性愛の強い犬は初めてだね。急にまたインゲがいないことを思い出したらしいのよ。牛乳をやっても見むきもしないの」
サムは根岸を見ると、尾を尻の間にはさんだまま飛びついてきた。喜びの表現ではない。なにかを訴えているように思える。それから今度はいても立ってもいられないような風情で、足踏みをしながら母と根岸の周囲をくるくると回りはじめた。そばでボンが不安そうな顔で立っている。

金網張りの扉一枚向こうからは、ロイ、ジュディが心配そうな表情で覗きこんでいた。サムはそうしながら、ときどき「アオアオアオ」と悲しそうな声を出す。

きぬはしゃがみこみ、サムの両耳を持つと、自分の頬にサムの顔をすりつけながら、

「よしよし。今度お前が生んだ仔は必ず残してあげるからね。堪忍してね」

と涙声でいった。きぬがそうするとサムは啼きやんだが、体が悲しみに耐えているように小刻みに顫えていた。

根岸の胸に、また何故とも知れぬ不吉な予感がよぎったが、その場でサムを見ていると、その予感が実現するような不安を覚えて、あわててまた自分の部屋に戻っていった。心の中で「鶴亀、鶴亀」と唱えていた。サムはそれから後も、断続的に悲しげな声を出したが、やがて啼き声は聞こえなくなった。

「はいはい。今井です。先程は失礼しました。どうですか。インゲは元気でしたか」

きぬの機嫌がいいときの癖の甲高い声が突然曇った。

「え、どうかしたんですか。はっきりおっしゃってください」

根岸がはっとして母を見ると、母の顔から急速に笑みが去り、恐怖にひきつった表情に変わるのがわかった。突然、「ぎえっ」というような声を出してのけぞった。それから前屈みになって体を顫わせた。

「そ、そんなばかな！」

雑誌を読んでいた苑子が本を置き、怯えた眼で根岸を見た。喬も初子と顔を見合わせた。

「え、え、え」

きぬはわずかの時間、先方のいうことを聞いていたが、突然「わっ」と大声で泣き出した。受話器を放り出したまま、体を畳の上に倒し、拳で畳を叩いて泣いた。

「どうしたんだ、お母さん」

「インゲが、インゲが死んじゃったのよお」

根岸の胸にぞっと戦慄が走った。今日の午後の一連のなにかしら不吉な、胸騒ぎに似た自分自身の不機嫌さのすべてがこれでわかったように感じた。しかし、まだ実感がなかった。

「どうして死んだんだ。泣いていたってわからないじゃないか」

根岸が声を励ますと、きぬは跡切れ跡切れにいった。

「あの男、大馬鹿野郎だよ。非常識よ。あのまんまの箱を……インゲを入れたまんまの箱を、ビニールで包んだまま家まで持って帰ったのよ。あれだけ電車に乗ったら顔を出させなさいといったのに。……新幹線に乗ったら膝に抱きなさいといったのに。窒息死よ。殺されたのと同じよ。あーっ」

畳の上に投げ出された受話器からは、「もしもし、もしもし……」と小さな声が呼びかけていた。根岸がそれを持った。

「とんでもないことになりました。お母さんを悲しませてしまって申し訳ございません。家でも家内が泣いていて、困っているんです。まさか、死んでいるとは夢にも思わなかったんです。箱の中でおとなしくなったから、眠ったのだとばっかり思っていたら……」

島村はそこで絶句した。

根岸の胸につい先刻までのインゲのかわいらしい小さな黒い頭の感触がよみがえってきた。円ないたずらっぽい瞳や黒々と濡れた鼻の頭も思い出されてくる。布きれを咥えさせると、前肢を

突っ張り、尻を立て、尾もぴんと立てて、幼い牙をむき出しにしながら、敵意まるだしの白眼を見せ頭を強く左右に振って、根岸の手からその布を奪い取ろうとするその仕草が、いま目の前にインゲがいるような感じで胸に浮かんできた。

「明日にしてください。いまその話をきくのはつらすぎますから……」

根岸はそういって受話器を置くと急速に酔いが全身に回ってくるのを覚えた。

きぬは身を顫わせたまま泣き続けていた。苑子がきぬに連られて泣きだした。初子は根岸の顔を一瞥してから無言で台所に立っていった。

「チクショウ。どうしてこんなことになったんだ。親父が悪いんだ。インゲを人にやるから悪いんだ。人にやる犬なんか生ませるから悪いんだ。かわいそうじゃないか」

喬が根岸を睨みつけた。

「馬鹿野郎。お前は黙ってろ」

根岸も立ち上がって睨むと、喬はぷいと自分の部屋に去っていった。根岸はそのまま母の部屋から犬舎に入った。サムはさっきのことが嘘のように機嫌よく根岸を迎えた。ボンも尾を振り、しゃがんでサムの頸を引きよせた根岸の顔をぺろぺろと舐めた。サムも根岸の耳を舐める。

「お前たちに悪いことをしてしまったよ。ごめんよな。サム。……ボン」

それだけいうとどっと涙が溢れてきた。

おれはもうすぐ四十七だ。分別盛りの大の男だ。それがたかが犬っころ一匹のために泣いている。みっともないぞ根岸英輔。心の隅からそんな声が聞こえてくるように感じた。そのときになって根岸は初めて自分がインゲを手放したくないと思っていたことに気づいたのである。

正月にはホリィが死んでいる。犬の数からいえば差引勘定はインゲを残したとてゼロになる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com